

3月16日(土) 13時～16時半

わたしの戦後

—PKP—1930（フィリピン共産党）との交流の経験と今後の課題

講師＝佐々木辰夫（アジア近現代史研究）

[報告者から一言]

日本国内において、フクバラハップのことは、中国における人民解放軍、朝鮮の抗日義勇軍及びベトナムのベトミンほどには知られていない。

フクバラハップ、またはフク団は、1940年代から60年代にかけてフィリピンで民族独立のためにたたかった人民の軍隊である。その歴史は、1941年、日本が第二次大戦でその地を侵略・統治したとき、日本軍にたいしてフィリピン人がフクボン バガン サ ハプトン、いわゆる「抗日人民軍」を組織してたたかったことから始まる。

フィリピンとの関係に限っていえば、こうした人民軍のたたかいに対する理解は全体として乏しかった。なぜだろうか？ わたしは、総じて日本におけるアジア認識は希薄であり、曖昧であり、経済偏重であったと思っている。

戦後、日本は経済援助の名の下に、「第二の侵略」を行なった。わたしたちはそこに、戦争の本質と、なぜ戦争が起きるのかという根本的な問題を考えなければならない。

わたしは高岩仁監督の『教えられなかった戦争・フィリピン篇』の製作のため、たびたびフィリピン現地を訪れ、直接に取材することができた。また、PKP-1930（フィリピン共産党）との交流のなかで、反ファシズム統一戦線戦術の呼びかけで、アジア・太平洋戦線に自発的に入隊したアメリカ合衆国共産主義者青年同盟員ポメロイ氏にもインタビューした。それらの経験を踏まえ、日本のわたしたちがフィリピン人民のたたかいに学び、また連帯を強めていく意味について参加者と議論したい。



中部ミンダナオ、ラナオ湖北岸ダンサランの前哨陣地のゲリラ兵士に、食料を届ける婦人兵士。1945年5月24日。

講師紹介

佐々木辰夫

1928年生まれ。中学校に職をうる。在職中から沖縄・奄美をはじめ日本各地の離島・僻地を精力的に歩く。同時に60年代、インド、沖縄その他に関するルポルタージュを『新日本文学』や関西在住者による文学・社会運動の同人誌『表象』『変革者』などに発表。80年代以降はおもにイラン革命、アフガニスタン革命について『社会評論』に執筆。同時にフィリピン・アフガニスタン・ソ連（とくにモスクワ）などに足しげく訪れる。高岩仁監督『教えられなかった戦争—フィリピン編』に協力。現地を訪れ取材した。

【主な著作】

『阿波根昌鴻—その闘いと思想』（03年）、『アフガニスタン四月革命』（05年）、『沖縄戦 もう一つの見方—宮本正男らの集団投降運動を中心に』（12年）、『沖縄 抵抗主体をどこにみるか—「処分」、徴兵忌避、移民・出稼ぎ労働者と宮城与徳』（16年）。発行＝スペース伽耶